

### 狂言学習：お稽古 3 日目《NO.4》

11月2日(木)は、午前中に『附子』を、午後からは『柿山伏』の稽古をしました。自分が山口先生からお稽古をつけていただくのは、長い稽古の時間の中の、33分の1の時間です。自分の演技指導の時間より、友達の演技指導を見学する時間の方が長いです。この見学の時間に、6年生の子どもたちが、どのような目標をもって学習に臨むかで、演技の仕上がり度が変わってきます。貪欲に学んでほしいと思います。



『柿山伏』では、最初に、山伏のセリフを受けて、後見が『地返し』を行います。

山伏は、威厳をもって表現する。歩く時は、平均台を歩くように歩く。高いところを見る時は、顎を起こして見る。  
 「これが山伏の行力です。」を、自慢そうに話す。  
 動きは、身をかかめると小さく見える。山伏の場合は、堂々とする。  
 「今度はつぶてを打って取ろう。えいえいやっとな。」のところは、見ている方向(つぶての飛んで行った方向)に手も向けて止める。

「ははあ、一夜のうちによく色づいたことかな。」畑主は、ゆっくりと話す。その間に、山伏が準備をする。畑主は、「今年は、豊作でうれしい。」という気持ちと、柿の実が当たって、「ア痛。」の気持ちを対比して表現する。



畑主と山伏のセリフが重なるところは、お互いにきっちりはっきりと言わないと、観客に伝わらない。  
 動きが入ると、ことばが少しおろそかになるが、狂言は、セリフ劇である。お腹から声を出して、しっかりと声を出すようにしましょう。

セリフは、ゆっくりと話すようにする。ことばが早いと、聞き取りにくい。  
 山伏が鳥の鳴き真似をする時は、ゆっくりと、柿の木の上で悠々と鳴いている様子を表現する。鳥の鳴き声は、結構遠くまで届くので、お腹に力を入れて、声を飛ばすようにしましょう。



「きゃあ〜、きゃあ、きゃあ、きゃあ、きゃあ。」と猿の身せせりをする時は、わき腹をかきます。山伏は、ことばを遠くへ届けようとしましょう。「南無三、見つけられた。」のセリフは、自分が納得しないと、相手には伝わらない。  
 相手をしっかり見て、声を届けるようにしましょう。



この場面は、リズム感のあるところで、畑主と山伏の息を合わせて。畑主は、山伏を困らせてやろうと思っているので、ゆっくりと話しましょう。





「よオ、この高い木の空から飛べと言う。」の、「このたかーい木」を表現するのに、中腰になる。

畑主の「とびそうな、とびそうな。」は、山伏が落ちるまで続ける。山伏が落ちるのを見届けてから、「ハーツ、ハツ、ハツ、ハツ、ハツ」と笑う。

全体的に、セリフは、ゆっくりと言うように心がけましょう。



狂言のセリフは、長年かかって今日（こんにち）まで、繰り返し繰り返し、これ以上少なくすると意味が通じないというところまで厳選している。  
ことばの一つ一つを大切に発音することが大事です。

畑主の「急いでもどろろ。」は、セリフと動きを合わす。  
畑主と山伏は、この場面はけんかごしで、会話をする。  
山伏のセリフの「あのたかーい木の空から飛ばせ・・・。」のところは、腰を浮かしながら話す。

つなぎの部分は、前の子がやっていたことを同じように受け継ぐこと。（つなぎを合わすように）



山伏は、数珠を自分の目の前で動かします。  
「これは、何とする。」は、しっかりと大きな声で話す。動作は、引っ張られるような感じを表現する。  
「あいた」を大きな声で言う。



落とされる方が、動く。  
「・・・㊦、こうしておいたがよい。」こうで、畑主は、体をひねり、山伏を落とすようにする。  
「よいなりの、よいなりの。」は、見えなくなるまで言い続ける。動きは、速足で歩く。